《巻 頭 言》

科学分析支援センターの存在意義と役割

総合研究機構長 川橋 正昭

基礎科学の発展が人類の福祉に貢献していることを疑う人はいないであろう.大学の教員は, その基礎科学の発展を支えているのが大学であると固く信じているに違いない.一方, 世の中では必ずしもそうは思われていないのではないだろうか.大学の存在の必然性については, 学歴を求める社会に対応する教育機関としての認識が最も一般的であろう.全ての大学に科学の発展への貢献を期待しているとは思えない.大学に対して厳しい意見が出てくる一つの要因もそのあたりにあると思われる.

ともあれ, 大学は間違いなく基礎科学の発展に寄与しなければならない.それに相応しい研究活動による知の創出と, その成果に基づく知の継承のための教育が大学の使命である.しかし, それは自己満足によってなされるものであってはならない.自らの研究成果については, 常に客観的な批判にさらされ, それに対応する状況におかれていなければならない.そのためには, 自らの研究成果を常に発信し続け, 世界に認識された研究としての位置付けを保ち続ける必要がある.すなわち, 自己主張のみで自分に都合のよい研究環境に埋没することは許されない.

本学でも, 優れた世界的研究者が, 優れた研究の成果を発信し続けている.一方で, 全般的には, 本学の研究成果発信力が十分でないことから, 世界的に認知されている研究成果に乏しいとの厳しい評価もある.したがって, 本学における研究力, 研究成果発信力の向上を, さらに推進していかなければならない.

基礎科学の発展は, 計測し分析することによってもたらされるといっても過言ではない.そのための設備が整備されているかいないかは, 研究遂行上の死命を制することがある.したがって, 大学での研究を推進するためには, 研究設備の整備は極めて重要である.しかし, その整備方法については, さまざまな要素を総合して判断しなければならない.大学全体としてどこまで責任を持って整備するかは, 大きな問題である.基礎研究の基盤を支える設備は, 大学として整備をする必要がある.しかし, それを発展させるための設備は, 科学研究費補助金をはじめとする競争的資金を獲得して整備することが基本である.そのためには, 世界的に認識される研究を実施し, 資金獲得において説得力ある研究構想, 研究成果が求められるのは必然である.

科学分析支援センターは, 基礎研究の基盤を支える設備を備え, まさに基礎的研究および教育の高度化推進を支援する役割を担っている.一方, 整備されている設備は, 全ての研究分野を網羅するものではない.したがって, ある程度限られた研究分野にとって大きな利点があることも事実であり, それもやむを得ない.しかし, 全学の経費でセンターの運営がなされている以上, 多くの利点を得ている研究分野では, それを十分認識したうえでの, それなりの貢献が欠かせない.また, 科学分析支援センターが, 引き続き全学的理解の下で運営されていくには, 違った側面の充実も図る必要がある.大学は基礎科学の発展を通じて人類の福祉に貢献することが重要な使命であるが, それを身近な形で表現するのが, 地域社会への貢献である.国の資金により整備された設備を有する科学分析支援センターは, それらの設備を積極的に地域社会に開放するシステムを整備することにより, 具体的貢献が可能である.

基礎科学の発展を担う全学的共同利用のセンターとして, 科学分析支援センターの存在は益々重要となっていくことは間違いない.そのためには, 整備状況に相応しい成果も問われる.もし, センター設備を利用して得られる研究成果が十分でなければ, 設備整備の説得力はなくなる.もし, 特定分野に偏りすぎ

た整備や運営がなされても，全学的な理解はなくなる.これらを総合的に判断しつつ，総合研究機構長としても，今後の科学分析支援センターの発展充実に全力を尽くす.